

『奥の細道』芭蕉自筆本文

萩原 義雄

<http://www.ese.yamanashi.ac.jp/~itoyo/basho/okunohosomichi/okuidex.htm>を参照して、再度校正入力を行った。

芭蕉自筆本と西村本との異同

下記における表記： **申筆本** 西村本

(芭蕉自筆本を訂正して西村本に改訂したと想定した表現)

「奥の細道」本文

月日は百代の過客にして行かふ
年も又旅人も舟の上に生涯
をうかべ馬の口とら~~ふ~~えて老をむ
かふる**もの物**は日々旅にして
旅を栖とす古人も多く旅に
死せるあり**予**もいづれの年よりか
片雲の風にさそはれて漂泊
の**拵**も**思**ひやまず海浜にさすらへ

~~て~~去年の秋江上の破屋に
蜘蛛の古巢をはらひてや
年も暮春**改**れ**ば**立る霞の空に
白川の関こえんとそごろ**が**み**神**
の物に**付**つきて**こ**ろ**心**をくるはせ
道**祖**祖神のまねきにあひて取
もの手につかずも引の破を
つゞり笠の緒付かえて三里に
灸すゆるより松嶋島の月先心
もと**な**しに**か**りて住る方は人に譲りて
杉風が別墅に移るに

草の戸も住替る代ぞ**難**ひ**な**の家

面八句を**書**て庵の柱に懸置

弥生も末の七日**禿**椽**工**と**せ**は**や**
明ぼの空臙々として月は有
あけ**在**明にて光おさまれる物から**雷**
士不**二**の峯幽かに**鬼**みえて上野谷
中の花の梢又いつかはと心ぼそし
むつまじきかぎりは宵よりつどひて

舟に乗りて送る千じゆと云処所
にて舟船をあがれば前途三

千里のおもひ胸にふさがりて

幻のちまたに離別の涙泪をそぐ

行春や鳥啼魚の目は泪

これはを矢立の初として行道

猶なをすくまず人々は途中に立

ならびて後かげのみゆるまで迄はと

見送なるべし

此たぶごとし元禄二とせにや奥羽長途の行脚たれ只

かりそめにおも思ひ立ちて呉天に

白髪の恨を重ぬといへども共

耳にふれていまだ申めに見ぬ境さかひ

若生て帰らばと定なき頼

の末を楽てかけ其日漸々草加と

云宿にたどりて着にけり瘦骨

の肩にかゝれる物先くるしむ

唯只身すがらにと拵出立侍を帟子

一衣は夜臥為と去の防ぎゆかた雨

具墨筆のたぐひあるはさ

りがたき花むけ銭などしたるは

さすがに打捨がたくて申々路頭路次の

煩となれるこそわりなけれ

室の八嶋島に詣す同行曾良が曰此神は

木の花さくや姫の神と申て富士一

躰也無戸室に入て焼たまま給ふ

ちかひのみ中に火火々出見のみこと

もまれ生れ給ひしより室の八嶋島と申又煙を

読習し侍もこの謂也將このしろといふ魚を禁ず

縁記起の旨世に伝ふ事も侍し

世日日光山の麓に泊るあるじの

云けるやう我名を仏五左衛門と云

万正直を旨とする故に人かくは

申侍もまゝ一夜の草の枕も打

け解て休み給へと云いかなる仏の

濁世塵土に示現してかゝる

桑門の乞食順礼ごときの人を

たすけ給ふにやとあるじのな
す事に心をとどめて**鬼みる**に唯
無智無分別にして正直偏固
のもの者也剛毅木納訥の仁に**ちか近**
きたぐひ**智患気稟**の清質尤尊
ぶべし

卯月朔日御山に詣拝す往昔此
御山を二荒山と書しを空海
大師開基の時日光と改**たま給**ふ
千歳未来をさとりに給ふにや今此
御光一天にかぐやきて恩沢八荒に
あふれ四民安堵の栖穩**也なり**猶
憚多くて筆を**指さし**置ぬ

あなちたふちと**青葉若葉**の日の光

黒髪山は霞かゝりて雪いまだ
白し

剃捨て黒髪山に衣更 曾良

南侍曾良は河合氏にして惣五郎
と云へり芭蕉の下葉に軒をならべて予が
薪水の労をたすく**此**このたび松嶋しま
象潟の眺共にせん事を**よむ**
ま悦び且は羈旅の難をいたは**ゆらんと**旅
立暁髪を剃て墨染にさまをか
小な惣五を改て宗悟とす仍て
黒髪山の句有衣更の二字**力有あり**て
きこゆ

十廿余丁山を登**つ**て滝有岩洞
の頂より飛流して百尺千岩の
碧潭に落**れ**岩窟に身をひそ
め入て滝の裏より**鬼み**ればうら
みの滝と申伝え侍る也

暫時しばらくは滝に**こもる**や夏の初

那す須の黒ばねと云**処所**に知人あれば
ま是より野越にかゝりて直道を
ゆかんとす遥に一村を見かけて
行に雨降**り**日暮る**も**農夫の

家に一夜をかりて明れば又

野中を行そこに野飼の

馬あり草刈おのこなげきよれば

野夫といへ**兼**どもさすがに情しらぬには

あらず非ずいかすべきやされ**兼**ども此野は東

市縦横にわかれてうゐる敷旅人の

道ふみたが**不**えんあやしう侍れば

まの此馬のとゞまる**処**所にて馬を返し

給へとかし侍ぬちいさき者ふたり馬の跡し

たひてはしる**ひまゆ**独は小娘姫にて

名をかさねと云聞なれぬ名のやさし

かりければ

かさねとは八重撫子の名成べし

曾良

頓て人里に至ればあたひを鞍つぼに

結付て馬を返しぬ

黒羽の館代浄坊寺**侘某**がしの方に音信ある

おも思ひがけぬあるじの**よま**悦び日夜語

つづけて其弟桃翠など云が朝夕勤

とぶらひ自の家にも伴ひて親属の

方にもまねかれ日をふるまんに

ひとひ郊外に逍遙して犬追**もの**物の跡

を一見し那**す須**の篠原をわけて玉藻の

前の古墳をとふそれより八幡宮に詣

与市**赤**扇扇的の射し特別しては我

国氏神正八まんとちかひしも此神社

にて待**む**とき**き**聞ば感応殊しきりに覚えらる

暮れば桃翠宅に帰る

修験光明寺と云有そこにまねかれて

行者堂を拝す

夏山に足駄をおが**拝**む首途哉

当国雲岸寺のおくに仏頂和尚の山

居の跡有あり

豎横の五尺にたらぬ草の庵

むすぶもくやし雨なかりせば

と松の炭して岩に書付侍りといつぞや

まき木聞え給ふ其跡みんと雲岸寺に杖を
曳ば人々すゝんで共にいざなひ若き
人おほく道の程ほど打さはぎておぼえず
彼麓に幸到る山はおくあるけしき
にて谷道はも小遙に松杉くも黒く
苔したぐりて卯月の天今猶寒し
十景尽る所橋をわたつて山門に入
さて彼かの跡はいつくの程ほどにやと後の山に
かけよちのぼれば石上の小菴岩窟に
むすびかけたり妙禅師の死
関法雲え法師の石室を見るが
ごとし

木啄も庵はくらはずやぶらず夏木立

ととりあへぬ一句を柱に残侍し
これはより殺生石に行館代より馬にて
送らる此口付のおのこ短束冊得させ
よと乞やさしき事を望侍るもの
かなと

野をよま横に馬挽牽むけよ郭公ほととぎす

殺生石は温泉の出る山陰に
あり石の毒気いまだ
ほろびず蜂蝶のたぐひ真砂
の色の見えぬほどかさなり死す
又清水流ながるゝの柳は葎野の
里にありて田の畔に残る此所の郡守故
戸部某の此柳見みせばやなど折々に
の給ひまき木聞え給ふをいつくのほどにやとお
も思ひしをけふ今日まの此柳のかげに
こそ立ち寄り侍つれ

田一枚植て立去る柳かな

心もと許なき日数かず重るまゝに白湍川の
関にかゝりて旅心定りぬ
いかでみやま都へと使もよめ求しも
断りなり也中にも此関は三関の
一にして風騒の人まを心をとむむ
秋風を耳に残しもみぢ紅葉を俤

にして青葉の梢猶あはれ也
卯の花の白妙に茨の花の咲そひて
雪にもこゆるまよも心地ぞする
古人冠をたどし正し衣漿装を改
し事など清輔の筆にもとぐめ
置れしとぞ

卯の花をかざしに関の晴着哉かな

曾良

東角とかくして越行まゝにあぶくま川
をわた渡る左りに会津根高く右に
岩城相馬箕張三春の庄常陸下野の地をさかひて
山つらなるかげ沼と云所を行にけふ今日は空
曇りて物ゝ影うつらず須すか川の
駅に等躬窮といふものをたづね尋て
四五日とぐめらる先「白河の関いかに
こえつるは」と問長途のくるしみ身心
つかれ且は風景に魂うばゝれ懐旧
に腸を断てはかばかしくおも思ひ
めぐらさず

風流の初やおくの田植うた

無下にこえんもさすがにと語れば
脇第三とつゞけて十三巻となしぬ
まの此宿の傍に大き成なる栗の木陰をたのみて
世をいとふ僧有椽ひろふ太山もかく
やと間に覺られてものに書付侍る
其詞

栗といふ文字は東西の木と
書て西方浄土に便ありと
行基菩薩の一生杖にも
柱にも此木を用給ふとかや

世の人の見付ぬ花や軒の栗

等躬窮が宅を出て五里計檜皮
の宿を離れてあさか山有道路より
も小近し此あたり沼多しかつみ刈比
もやゝも小小近うなればいづれの草を花
かつみとは云ぞと人々に尋侍れども
更知人なし沼を尋人にとひかつみ

かつみと尋ありきて日は山の端にかゝりぬ
二本松より右にきれて黒塚の岩屋
一見し 福嶋島に泊宿るあくればしの
ぶもぢ摺りの石を尋て忍ぶの里さとに行
はるか遙山陰の小里に石の半土に埋てあり
里の童木部の来りてをし木教けるがむかし昔は
まの此山の上に侍しを往来の人の麦艸草を
あらしてまの此石を試侍るをにくみて
まの此谷につき落せば石のおもて面下
ざまにふしたりと云さもあるべき事もにや

早苗とる手もつや昔しのぶ摺

月の輪の漑わたしを越て瀬の上と云宿に
出づ佐藤庄司が旧跡はひだり左の山際一
里半計に有飯塚の里鯖野と聞
尋ゝ行に丸山と云に尋あたる
是庄司が旧館也麓に大手の跡な
ど人のをしゆ教ゆるにまかせて泪を落し又
かたはらの古寺に一家の石碑を残す

中にも二人の嫁がしるし先あはれなり哀也
をんな女なれ共どもかひがひ敷しき名の世に聞へえ
つるもの物哉かなと袂をぬらしぬ墜墮涙
の石碑も遠きにあらず寺に入て
ちや茶を乞へば爰に義経の太刀弁慶が
笈をとめて汁物とす

笈も太刀も五月にかざれ帟幟

五月朔日の事也

其夜飯塚にとまる出湯温泉あれば湯に入て宿をかるに
土坐に筵を敷てあやしき貧家也
ともし灯もなければゆもりありの火かげに
寐寝所をまうけても臥す夜に入て雷
鳴雨しきりに降てもした臥る上はより
雨もりす蚤蚊にせゝられて眠らず
持病さへおこりて消入計になん短
夜の空もやうやう明れば又旅立ぬ猶
よも夜の名残余波心すゝまず馬かりて桑折
の駅に出るはるか遙なる行末をかゝえ
てかゝ斯る病覚束なしといへど羈旅

辺土の行脚捨身無常

の観念**道路**にしなん**これ**是

天の命なりと氣力聊とり直し

道路縦横に踏で伊達の大木戸を
こす

あぶみ鐙摺白石の城を過て

笠しま島の郡に入れば藤中

将実方の塚はいづくの**程**ほどならんと

人にとへば

これ是より遙右に見ゆる山際の里を

みのわ**笠嶋島**と云道**岨**祖神の社かた**み見**

の薄今に**侍**もありと**おし**教ゆ此比の五月雨に

道いとあしく身つかれ侍ればよそながら

ながめ眺やりて過るに**みの**は**蓑輪**笠しま島も

五月雨の折にふれたり

笠嶋島はいづくさ月のぬかり道

岩沼に宿る

武隈の松にこそ**申**め覚る心地はすれ

根は土際より二木にわかれて**むかし**昔の

姿うしなはずとしらる先能因法師**おも**思ひ

出往昔むつのかみにて下りし人此

木を伐て名取川の橋杭にせられたる

事などあればにや松は此たび跡もなしとは

よみ詠たり代々あるは**まり**伐あるひは植**次**継

などせしと聞に今将千歳の

かたちとこのほひて、めでたき松のけしきに
なん侍し

たげくま武隈の松みせ申せ遅桜

と拳白と云ものゝ餞別したり

ければ

桜より松は二木を二月越シ

名取川を**わた**り渡りて仙台に入あやめふ

く日也旅宿をもとめて四五日逗留す

爰に画工加右衛門と云ものあり聊心

ある**もの**者と聞て知る人になるこの

もの者年比さだかならぬ名どころを考置

侍ればとて一日案内す宮城野の
萩茂りあひて秋のけしま気色おも思ひ
やらるるゝ玉田よこ野つゝじがお小岡はあせひ
咲比ころ也日かげ影もよもらぬ松の林に
入て爰を木の下と云とぞむかし昔も
かく露ふかければこそみさぶらひみ
かさとはよみたれ薬師堂天神の
御社などおがみ拜て其日はくれぬ
猶松嶋島塩がまの所々画にかき書て
送る且紺の染緒つけたる草鞋
二東足はなむけ餞すさればこそ
風流のしれもの爰に至りて
其実をあらは頭す

あやめ草足に結ん草鞋の緒

彼かの画図にまかせてたどり行ばおくの細道
の山際に十符の菅有今も年々十符の
菅菰を調て国守に献ずと云り

壺碑 市川村多賀城に有

つぼの石ぶみは高き六尺余横二尺計敷苔を
穿て文字幽也四維国界之数里を印しるす此城
神亀元年按察使鎮守布符將軍大野
朝臣東人之所里也天平宝字六年
参議東海東山節度使同將軍惠
美朝臣朝獨修造而十二月十朔日と有
聖武皇帝の御時にあた当れりむかし
よりよみ置る歌枕多くおほくかたり語伝ふ
といへども山崩川流て道あらたま
り石は埋て土にかくれ木は
老て若木にかはれば時移り
代変じて其跡たしかならぬ
事のみを爰に至りてもたがひ疑なき
千歳の記念今眼前に古人の心
を関す行脚の一徳存命の悦び
羈旅の労をわすれて泪も落る
ばかり也

それより野田の玉川沖の石を

尋ぬ末の松山は寺を造りて
末一松一山と去いふ松のあひあひ皆墓原はら
にてはねをかはし枝をつらぬる
契りの末も終にはかくのごときと
かな悲しさも増りて塩がまの浦に
入逢相のかねを聞五月雨の空聊
はれて夕月夜かす小幽に籬が嶋島も
程ほどち小近しあま蟹の小舟こぎつれて
肴わかつま声々に
綱手つなでかなしもとよみけん歌のたまわ心も
しられていとあはれ哀也其夜目盲法
師の琵琶をならして輿上るりと云もの
をかたる平家にもあらず舞にもあらずひ
なびたる調子打もうち上て枕ちかうかしましけれど
さすがに辺国士の遺風わす忘れざるもの
から殊勝に覚らる

早朝塩竈がまの明神に詣り国守再興改せられて
宮柱ふとしく彩椽きらびやかに
石の階九尋切に重り朝日あけの玉

がきをかゝやかすかゝる道の果塵土
のまかひ境まで神靈あらたにまします
こそ吾国の風俗なれといと貴しけれ
神前に古き宝燈有かねの戸びら
のちもて面に文治三年和泉の三郎
奇進と有五百年來の佛今日
の前にうかびてそゝろに珍し
渠は勇義忠孝の士也佳命名今
に至りてしたはずといふ事なし誠人能
道を勤め義を守り佳命をおもふるべし
名も又またよれ是にしたがふと云り
日既午にちかし舟船をかりて松嶋島に
渡りわたる其間二里余小嶋雄島の磯につく

抑ことふりにたれど松嶋島は扶桑第一の好風に
しておよそ凡洞庭西湖を恥ず
東南より海を入れて江の中三里浙
江の潮をたふ嶋島々の数を尽して
敬ものは天を指ふすものは波に匍
匍あるは二重にかさなり、三重に

畳みて左りにわかれ右につらなる負る
あり抱るあり児孫愛すがごとし

松の**みどり**緑こまやかに、枝葉汐風に
吹たはめて**雍屈**一曲をのづからためた
るがごとし其気色窅然として

美人の顔を粧ふ**千車**ちはや振神のむかし
大山ずみのなせるわざにや造一化の
天工いづれの人か筆をふるひ詞を
尽さむ

小嶋雄島が磯は地つゞきて海に**成出**たる**嶋島**也雲
居禅師の別室の跡坐禅石など有将松

の木陰に世をいとふ人も稀々見え侍りて落
津穂松笠など打煙けふりたる草の**庵菴**閑閑に住なし

いかなる人とはしられずながら先なつかしく立
寄ほどに月海に**移うつり**て昼のながめ又
あらたむ江上に帰りて宿を求めれば窓を

開ひらき二階を作て風雲の中に**旅寝**する
こそあやしきまで**たふ**妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほととぎす 曾良
予は口をとちて眠らんとして

いねられず旧庵をわかるゝ時素堂

松嶋島の詩有あり**原安**適松がうらしまの
和歌を**迷贈**らる袋を解てこよひの

友とす且杉風濁子が発句あり
十一日瑞岩寺に詣当寺三十二世の

昔真壁の平四郎出家して入唐
帰朝の後開山す其後に雲居禅師

の徳化に**依依**て七堂薨改りて
金壁莊巖光を輝ん仏土

成就の大伽藍とはなれりける
彼見仏聖の寺はいづくにやとしたはる

十二日平泉と心**指ぎ**しあねはの松
緒だえの橋など聞伝て人跡

稀に雉兔藪一蕘の往かふ道こそ
井ともわかず終に**道路**ふみたがへて石

の巻といふ湊に出ぐこがね花咲と
よみて奉りたる金花山海上に見**渡**わたし

数百の廻船入江につどひ人家地をあらそ
ひて竈の**けぶり**煙立つげたり**おも**思ひ

かけずかゝ斯る**処所**にも来れる哉と宿からんとすれど更に宿かす人なし漸々まどしき小家に一夜を**明あか**して明れば又しらぬ道まよひ行袖のわたり尾ぶちの牧まの**くかや萱**はらなどよそめにみて**はるもか遙**なる堤を行心**ばを細**き長沼にそふて戸伊摩と云所に一宿して平泉に**奎**到る其間**十廿**余里程とほど**と覚おぼゆ**

三代の栄耀一睡の中にして大門の跡は一里こなたに有秀衡が跡は田野に**なり成**て金鶏山のみ形を残す先高館にのぼれば北上川南部より流るゝ大河也衣川は和泉が城をめぐりて高**館**の下にて大河に落入**康泰**衡等が旧跡は衣が関を隔て南部口を**指さ**しか**た堅め**る**夷**をふせぐとみえたり**扱**倍も義臣すぐつて此城に籠こもり功名一時の**車村**叢となる

国破れて山河あり城春にして**青々草青**みたりと笠打敷て時のうつるまで**なみだ**泪を落し侍りぬ

夏**艸**草や兵**共**どもが夢の跡

曾良

兼て耳驚したる二堂開帳す経堂は

三将の像を**残**の**こし**光堂は二代の棺を

納**め**三尊の仏を安置す七宝散うせて

玉珠の扉風に破やぶれ金の柱霜雪に朽て

既頽廃空虚の**車村**叢と**な**成るべきを

四面新に囲て甍を覆て風雨を凌

暫時千歳の記念とはなれり

五月雨のや年々降て五百たびの**こ**してや光堂

螢火の暈は消つと柱かな

南部道**はるもか遙**に見みやりて岩手の里に泊る小黒崎水みづの小嶋島を過てなるこの湯より尿前の関にかゝりて出羽の国に越んとす此**道路**

旅人稀なる処所なれば関守に
あやしめられて漸^はとして関を
こす大山をのぼつて日既暮け
れば封人の家を見かけて舎り
を求^む三日風雨あれてよし
なき山中に逗留す

蚤虱馬の尿する枕もと

あるじの云^は礼是より出羽の国に
大山を隔て道さだかならざれば
道しるべの人を頼^みて越べきよしを
申さらばと云て人を頼侍れば
究^へ竟の若^もの者反脇指をよこた^へえ櫛の
杖を携て我々が先に立て行
けふこそ必あやうきめにもあふべき
日なれと辛き思ひをなして
後について行あるじの云にたがはず
高山森々として一鳥声きかず木
の下闇茂りあひて夜^る行がごとし
雲端に土^ちちふる心地して篠の中踏分
踏分水をわたり岩につま^むむい蹶て

肌につめたき汗を流して最上の
庄に出^づ彼かの案内せしおのこの云やう
まの此道みち必不用の事有^ゆが恙なう迷をくり
まいらせて仕合したりとよるこびて
わかれぬ跡に聞てさへ胸とどろく
のみ也

尾花沢にて清風と云^もの者を尋ぬ
かれは富るものなれども心^ざし志^ます
がはいやしからず都にも折々かよひて
さすがに旅の情をもし^ゆ知たれば日比とゞめて
長途のいたはりさまさまにもてなし侍る

涼しさを我宿にしてねまる也

這出よかひやが下のひきの^よあ声
まゆはきを俤にして紅粉の花
子蚕飼する人は古代の^塗すがた哉

曾良

山形領に立石寺と云山寺有^り
慈覚大師の開^記基にして殊清閑の

地也一見すべきよし人々のすゝむるに
仍依て尾花沢よりとつて返し其間
七里**訛ばかりなり也**日いまだ暮ず麓の
坊に宿かり置て山上の堂に**奪のぼる**
岩に岩尾巖を重て山とし松栢年ふり旧
土石老て苔なめらか滑に岩上の院々
扉を閉て物の音きこえず岸をめぐり
岩を這て仏閣を拜し佳景寂寞
として**まま心**すみ行のみ覚おぼゆ

閑さや岩にしみ入蟬の声

もがみがわ最上川のらんと大石田と云処所に
日和を待爰に古き俳諧の**たね種**
落こぼれてわす忘れぬ花のむかしを
したひ芦角一声の心をやはらげ此
道にさぐりあし**して**新古ふた道に
ふみまよふといへどもみちしるべする人し
なければとわりなき一卷を**残しぬ**
このたびの風流 爰に**いた**至れり

最上川はみちのくより出て山形を
水上とすごてんはやぶさなど云お
そろしき難所有板敷山の北を
流て果は酒田の海に入左一右山
おほ覆ひ茂みの中に船を下**す**
されを是にいなふね稲つみたるをや、いな船と本
いふならし。白糸の滝は青葉
の隙々に落て仙人掌岸に臨て立
水みなぎつて舟あやうし

まみだれ五月雨をあつめて早し最上川

六月三日羽黒山に登る函司左吉
と云**もの者**を尋て別当代会覚阿
闍梨に謁す南谷の別院に舎して
憐愍の情こまやかにあるじせらる
四日於本坊に**をゐて**俳諧興行

有難や雪をかほらす南谷

五日権現に詣当山開闢能除大師は

いづれの代の人と云事を知らず

延喜式に羽州里山の神社と有書

写黒の字誤を里山となせるにや羽

州黒山を中略して羽黒山と云にや

出羽といへるは、「鳥の毛羽を此国の貢に献る」と風土記に侍とやらん。

月山湯殿を合て三山とす当一寺

武一江東一叡に属して天一台止一觀の

月明らかに円一頓融一通の法の燈かゞげ

そひて僧坊棟をならべ修一験行一

法を励し靈一山靈一地の 校一験効人貴キ

且恐オスる繁トシメ一栄長にして申出めで度御山

可と謂つべし

八日月一山に牽ヒのぼるに木綿しめ身に引かけ

宝一冠に頭を包強一力と云ものに

道びかれて雲一霧山一氣の中に

氷一雪を踏てのぼる事八里更に

日一月行一道の雲一関に入かとあやしまれ

息絶身こゝえて頂一上に牽ヒ臻れば

日没て月あらわ頭カる笹を鋪篠を

枕として臥て明るを待日出て雲

消れば湯殿に下ル

谷の傍に鍛冶小屋と云有此国の鍛

冶靈一水を撰て爰に潔一斎して

劔を打終月一山と銘を切て世に

賞せらる彼童一泉に劔を淬とかや

干将莫耶の昔ムかしをしたふ道に堪

能の執あさからぬ事しられたり

岩に腰かけてしばしやすらふ程ほど

三尺誹ばかりなる桜のつぼみ半ばにひらける

ありふり積雪の下に埋てはむ春をお

す忘れぬ遅ぎくらの花の心わりなし

炎天の梅一花爰にかほるがごとし

行尊親主僧正の歌の哀も爰に思ひ出で、猶増まさりて覚ゆ

惣而て此山一中の微一細行者の法式として

他言する事を禁ず仍て筆をととめて

しる記さず

坊に帰れば阿闍梨の求需に依て

三一山順一礼の句々短束冊に書

涼しさやほの三か月の羽黒山

雲の峯峰幾つ崩て月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂哉かな
湯殿山銭ふむ道のなみだ泪かな

曾良

羽黒を立て鶴が岡の城下長山氏
重行と云もの物のふの家にもかへられて
俳諧一卷有左吉も共に送りぬ
川舟に乗て酒田のみなま湊に下る
淵庵不玉と云医師の許を宿とす
あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ
暑き日を海にいれたり最上川

江一山水一陸の風光数を尽して今象潟に
方寸を責酒田の湊より東一
北の方山を越礮をつた伝ひいさを踏ふみ
て其際十里日影やゝかたぶく比
汐風真砂を吹上雨朦一朧として
鳥海の高かくる闇一中に莫一作して
雨も又奇なり也とせば雨後の晴一色又

頼母敷と蟹の苦屋に膝を木入れて雨の
晴もよを待其朝天能晴霽て朝日
花やかに指さし出る程に象潟に舟をうかぶ
先能因嶋島に舟をよせて三年幽
居の跡をとぶらひむかふの岸に舟
をあがれば花の上こくとよまれし
桜の老木西行法師の記念を残のこす
江上に御陵あり神功皇宮の
御墓と云寺を干満珠寺と云

この此処に行幸ありし事いまだま
か聞ずいかなる故あも事にや此寺の
方丈に座して簾を捲ば風景
一眼の中に尽て南に鳥海天を
さへえ其陰うつりて江に有あり西は
むやむやの関路をかぎり東に堤
を築て秋田にかよふ道遙に海北に
かまへて波浪打入るゝ処所を汐こしと云
江の縦横一里ばかり佛松嶋島に
かよひて又異なり松しま島はわも笑ふがむと如く
象潟はうらむがごとしまが寂しさに

小な悲しみをくはえて地勢魂をなや
ますに似たり

象潟や雨に西施がねぶの花
汐越や鶴はぎぬれて海涼し

祭礼

象潟や料理何くふ神祭

曾良

番の家や戸板を敷て夕すもみ涼

美濃の国商人

低耳

岩上に雌鳩みさこの巢を見る

波こえぬ契ありてやみさこの巢

曾良

酒田の余波日を重て北陸道の

雲に望蓬遙々のおもひ胸をいた

まして加賀の帯府まで百三十世

里と聞鼠の関をこゆれば

越後の地に歩行を改て越中

の国一ぶりの関に牽到る此間九日

暑湿の労に神をなやまし病をおこりて

事をしるさず。

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡によこたふ天河

けふ今日は親しらず子しらず犬もどり駒返し

など云北国一の難所を越てつかれ

侍れば枕引よせて寝寐たるに一間隔て

面の方に若きまんな女の声二人計ときこゆ

年老たるおのこの声も交て物語する

をきけば越後の国新潟と云処所の

遊女成し伊勢に参宮するとして

此関までおのこの送りてあすは古里郷に

かへす文したためてはかなき言伝など

しやる也白波浪のよする汀に身をはふら

かしあまのこの世をあさましよう下りて

定めなき契日々の業因いかにつた

なしと物云を聞々き々き々寝寐入てあし

た旅たつ立に我々にむかひて

行末衛しらぬ旅路のうさあまり覚

束なう悲しく侍れば見えがくれに

も御跡をしたひ侍ん衣の上の御情

に大慈のめぐみをたれて結縁せさせ給へと**なみた**泪を落す不便の事には**おもひ**侍れ**共ども**我々は所々にてとゞまる方おほし
唯只人の行にまかせて行べし
神明の加護**必かならず**よ**がな**も**あ**悪なかるべしと云捨て出つゝ**あはれ**哀さ
しばらくやまざりけらし

一家に遊女もねたり萩と月

曾良にかたれば書とゞめ侍る

くろべ四十八**が**瀬とかや数しらぬ川を
わたりて那古と云浦に出担籠の藤
波浪は春ならず**共ども**初秋の**あはれ**哀
とふべきものと人に尋れば是より
五里**磯いそ**つた伝ひしてむかふの山陰に**木**いり
蟹の**芹**苦ぶきかすかなれば**蘆**の一夜の宿
かすものあるまじと**木**いひをどされて
かゞの国に入

わせの香や分入右は有そ磯海

卯の花山くりからが谷をこえて金
沢は七月中の五日也爰に大坂より
かよふ商人何処と云**もの者あり**有それが
旅宿をともしす
一笑と云ものは此道にすける名の
ほのぼの聞**く**えて、世に知人も侍しに去年
の冬早世したりとて其兄追善
を催**す**に

塚も**あぶ**動け我泣声は秋の風

ある草庵にいざなはれて

秋**す**し涼し手毎にむげや瓜**末**茄**茄子**

途中唸

あかあかと日は難一面も**秋**あきの風

※「天茄」論文

此所太田の神社に詣**斎**藤**別**

当真盛**実**盛が甲錦の切あり**某**往昔

源氏に属せし時義朝公より給はらせ給ふとかや

げにも平土のものにあらず目庇より
吹返しまで菊から**艸草**のほりもの金
をちりばめ竜頭に鍬形打たり
真盛討死の後木**曾**義仲願
状にそへて此社にこめられ侍**む**
よし樋口の次郎が使せし事共
まのあたり縁**記起**にみえたり
むざんやな甲の下のきりぎりす

山中の温泉に行ほど白根が嶽
跡にみなしてあゆむ左**ゆ**の山際に
観音堂**布あり**花山の法皇三十三所
の順礼とげさせ給ひて後大慈大悲の
像を安置し給ひて那谷と名付給ふと也
那智谷**組汲**の二字をわかち侍しとぞ
奇一石さまさまに古一松植ならべて
萱ぶきの小堂岩の上に造り
かけて殊勝の土地也

石山の石より白し秋の風

温泉に浴す其功有**開明**に次と云

山中や菊はたを**お**らぬ湯の匂

あるじとする**もの物**は久米之助とて
いまだ小童也かれが父俳諧を好てみ
洛の貞室若輩のむかし爰に
来りし比風雅に辱しめられて洛
に帰りて貞徳の門人となつて世に
しらる功名の後此一村判詞の料を請ず
と云今更むかし**物語**とは**成なりぬ**
曾良は腹を病て伊勢の国長嶋島
と云**処所**にゆかりあれば先立て**旅**
立行に

ゆまゆま行行てたふれ伏**共**とも萩の原

曾良

と書置たり行ものゝ悲しみ残る
ものゝうらみ隻**鳴鳧**のわかれて雲に
まよぶがごとし予も又

けふ今日よりや書付消さん笠の露

大聖持の城外全昌寺と去いふ寺に
泊とまる猶か加賀の地也曾良も前の
夜此寺に泊りて、

終宵秋風聞やうらの山

と残す一夜の隔千里におなじ同じ
我吾も秋風を聞て衆寮に臥ば
明ぼの空もかみ近う読経聞ゆも声すむまゝに板鐘鐘板
鳴て食堂に入けふは越前の
国へと心早卒にして堂下に下るを
若き僧兼ども紙硯をかゝえて階の
もとまで追来る折節庭中の
柳散れば

庭掃て出ばや寺に散柳

とりあへぬ十旬さまして草鞋ながら書捨つ
越前の境吉崎の入江を舟に
棹指して汐越の松を尋ぬ
終宵嵐に波をはこばせて

月をたれたる汐越の松 西行

よの此一首にて数景尽たり帯もし一

弁を加ふるものは無用の指を立るがごとし

丸岡天竜寺の長老古き因あれば
尋ぬ又金沢の北枝と去いふものかりそ
めに見送りて此処までしたひ来る所々の
風景過さずおも思ひつゞけて
折節あはれなる作意など聞ゆ
今既別に望みて

物書て扇引割さく名残余波哉

五十丁山に入て永平寺を礼す道元
禅師の御寺也邦機千里を避て
かゝる山陰に跡を残し給ふも貴き
故ゆへ有とかや

福井は三里計なれば夕飯した
たゝめて出るにたそかれの道路たど
たどし爰に等裁と云古き
隠士有いづれの年にやか江戸に

来りて予を尋遙十とせ余り也
いかに老さらばひて有にや将死け
るにやと人に尋侍ればいまだ
存命してそこそこををし教ゆ
市中ひそかに引入てあやしの
小家に夕貌へちまのはえかゝりて鶏
頭はゝ木ゝに戸ぼそをかくす扱きて
は此うちにこそと門を叩ば侘し
げなる女の出ていづくよりわたり
給ふ道心の御坊にやあるじは
まの此あたり侘某がしと云ものゝ方に行
ぬもし用あらば尋給へとまいふかれが
妻なるべしとしらるむかし物
がたりにこそかゝる風情は侍れと
やがて尋あひて其その家に二夜
とまりて名月はつるがの湊みなどに
と旅たひ立等裁も共に送らんと裾
おかしうからげて道路の枝折とうかれ
立

漸白根が嶽かくれて比那が
嵩あらはるあさむづの橋をわ
たりて玉江の葎蘆は穂に出にけり
鶯の関を過て湯尾峠を越れ
ば火打燈が城かへる山やまに初雁を聞
て十四日の夕暮ぐれつるがの津に
宿をもとむ
某その夜月殊晴たりあすの夜もかく
あるべきにやといへば越路のなら習ひ
猶明夜の陰晴はかり難がたしと、あるじに
酒すゝめられてけいの明神に夜参す
仲哀天皇の御廟也社頭神さびて
松の木の間にもり入たるおまへの
白砂霜を敷るがごとし往昔
遊行二世の上人大願発起の事
ありてみづから葦草を刈土石を荷ひ
泥凪をかはかせて参詣往来の煩
なし古例今にたえず神前に
真砂を荷ひ給ふこれを遊行の砂持と

申侍ると亭主のかたりける

月清し遊行のもてる砂の上

十五日亭主の詞にたがはず雨降

名月や北国日和定なき

十六日空晴霽たればますほの小貝ひろ

はんと種の浜に舟を走す海上七

里あり天屋何某と云もの破籠まき

小竹筒などごまやかにしたくめさせ僕あ

また舟にとりのせて追風時の聞ま

に吹付着ぬ浜はわづかなる輩海士の小家

にて侘しき法華花寺あり爰にちや茶

をのみ飲酒をあたくめて夕暮ぐれのさびしさ

感に堪たり

さび寂しさやすま須磨に勝かちたる浜の秋

波の間や小貝にまじる萩の塵

其日の申記あらまし等裁に筆をとらせて

寺に残す

露通もまの此みなと連まで出むかひてみのゝ

国へと伴ふ駒をはやゆめにたすけられて大垣の

庄に入ば曾良も伊勢より来り合

越人も馬をとばせて如行が家に

入集る前川子荊口父子其外

したしき人々日夜とぶらひておた

たが蘇生のものにあふがごとく且

よまよ悦び且なげますいたはる旅のもの物うさも

いまだやまざるに長月六日になれば

伊勢の遷宮おがまんと又おね舟に

乗のりて

蛤のふたみに別わかれ行秋ぞ

① 簡単なひらがな文字の漢字置換

例)「うまれ↓生れ」「みる↓見る」「つたひ↓伝ひ」「をんな↓女」「あはれ↓哀」「ならひ↓習ひ」「ちかし↓近し」「ふす↓臥す」「よる↓夜」「むかし↓昔」「ころ↓心」

② 難しい漢字のひらがな置換

例)「猶↓なほ」「礪↓いそ」「湊↓みなと」「睥鳩↓みさご」「

③ 不適切な用字の訂正

例)「道岨神↓道祖神」「仍↓依」「処↓所」「短尺↓短冊」「下ル↓下る(下付カタカナ全廃)」「左り↓左」「火打が城↓燧が城」「大き成↓大きなる」「栗といふ文字は東西の木と」

④ 汎用性の高い方の選択 「艸↓草」「波↓浪」「縁記↓縁起」「有↓あり」「道↓路」「この↓此」「寐↓寝」「名残↓余波」

⑤ 素龍の趣味か? 「晴れ↓霽れ」「ささへ↓小竹筒」

⑥ 素龍の転記ミスか? 「有馬↓有明」「山中温泉での曾良の句に曾良の名前が落ちている」

⑦ 混乱してる用字例

「舟/舩」「涙/泪」「みる/見る」「もの/物/者」

⑧ 芭蕉の学識不足による?

「剛毅木納訥の仁」「智愚氣稟の清質」「墜墮涙の石碑」「康泰衡」

⑨ 芭蕉が関与して改めたと思われるもの

例)「予もいづれの年」「弥生も末の七日**赤穂土とせはや**(ことし**元禄二とせにや**奥羽長途の行脚)」「草加と云宿にたどりて着にけり」「脇第三とつづけて**十三卷となしぬ**」「等躬窮」「五月雨の**や年々降て五亩たの**の(として**や光堂**」「**螢火の昼は消ゆと柱小な**」「富るものなれども**心まし志ます**がはいやしからず都にも折々かよひて**ます**がに旅の情をも」

※「天茄」と「茄子」の論(平成十三年度全国大学国語古文学会夏季大会、研究発表「天茄の正体」赤羽学氏(安田女子大学大学院教授)がある。参考資料として少しく、この「要旨集」を後に記載しておく。

一、中尾本の前後の語記述

元禄四年十月刊「松編」西の雲』に「残暑しばし手毎にれうれ瓜茄子」

宝暦十三年序関更編『花の故事』に「残暑暫手毎にれうれ瓜茄子」

中尾本『奥の細道』 に「秋すゞし手毎にむけや瓜**天茄**」

曾良本『奥の細道』(底本)に「秋すゞし手毎にむけや瓜**天茄**」

曾良本『奥の細道』(墨訂)に「秋すゞし手毎にむけや瓜**天茄**」

素龍清書西村本『奥の細道』に「秋すゞし手毎にむけや瓜茄子」

二、芭蕉以前の日本における「天茄」の使用例は皆無

三、和刻本、寛永十四年版『本草綱目』卷之十六目錄草部濕草図

龍葵／天茄

四、和刻本、寛永十四年版『本草綱目』卷之十六、本文

龍葵 唐本
草

コナスビ
オナスビ

釋名**苦葵** 圖 **苦菜** 唐本 **天茄子** 圖 **水茄** 綱目 **天泡草** 綱目 **老鴉酸漿草** 綱目 **老鴉晴草** 圖 (注記略)

五、寛文十二年刊『正本草綱目』(貝原益軒著)

龍葵 唐本
草

六、貝原益軒の『大和本草』(宝永六年刊)の「龍葵」解説

龍葵 こなすび。一名いぬほうづき。又ひたいほうづき。葉は茄に似て、子小にてまるし。熟すれば黒し。茄子には似ず。且大小甚異。其實を汗瘡に付れば癒ゆ。本草に、此能ある事を不載。又一種、實の赤あり。龍珠と云。日本には、此種未見之。(卷之五(草之五)雜草類)

七、貝原益軒の『大和本草』(宝永六年刊)の「唐がき」解説

唐がき(和品) 又珊瑚茄なすびと云。俗名なり。葉は艾葉に似て大なり。又南天燭西瓜の葉に似たり。每葉小片兩々相對して、大小相挾めり。實はほうづきより大にして殼苞なし。熟すれば赤し。其さねは龍葵の如し。稻若水曰、天茄子なり。老鴉眼睛草をも、天茄子と云。それに非ず。

八、「唐がき」を「天茄子」とする説は、誤りとする指摘

『大和本草』〔白井光太郎校注昭和五十年十月、有明書房刊〕第一冊の頭注に、「蘭山曰、唐カキ此ハサンゴシユナスビト云葉艾葉南天葉ニ似ト云ハ不可水ウリニ似タル所アリ天茄子ト云ハ誤ナリ天茄子ハ即龍葵ニシテ和名イヌホ、ツキナリ」※小野蘭山『本草綱目啓蒙』〔享和三〇文化三年刊、四十八卷二十七冊〕

九、『本草綱目拾遺』〔清趙學敏著、清同治十年刊〕に見える「天茄」

鈴木真海註『國訳本草綱目拾遺』(一)〔昭和八年、春陽堂刊〕

十、『五雜俎』〔十六卷、明の謝肇淛撰、万暦年間、一五七三〜一六二〇年成る。寛文元年に和刻本刊行、長沢規矩也解題、昭和四七年八月、汲古書院刊〕和刻本漢籍隨筆集』所収〕に見える「天茄」

十一、「ハリアサガホ」としての「天茄兒」

十二、「瓜茄子」は、誹諧の慣用句であった(正岡子規『分類俳句』より)